

目指す学校像	子どもたちが嬉々として登校し充実感に満ちて家路につく学校 ~みんな友達 笑顔の原小~
--------	--

重点目標	1 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実 2 心身ともに安心・安全な学校生活の構築 3 CSとして学校、家庭、地域が役割を果たし連携し信頼し合う開かれた学校づくりの推進 4 風通しのよい職場づくりと、教職員とともに取り組む業務改善
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。  
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価							学校運営協議会による評価	
年度目標			年度評価				実施日令和7年2月20日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	<現状> ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査では、概ね良好な結果である。 ○9割以上の児童が、授業を通してできるようになったことがあると達成感を感じている。  <課題> ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査の結果から、自分の考えをまとめることや既習事項を用いた回答に苦手意識がある児童が多い。 ○3割ほどの児童が、進んで発表することに苦手意識をもっている。 ○発達段階に応じたタブレットの活用スキルを計画的に高めていく必要がある。	・学びのポイント(じ・し・や・く)の視点に基づく授業改善  ・シン・GIGA スクール構想の更なる推進	①教育委員会と連携し、指導主事から学びのポイントについての講話を聞く。 ②一人二本公開授業を実施し、お互いの授業を見合うことで、学びのポイントの視点を授業実践に落とし込む。 ③学びのポイントを意識した単元計画の作成することで、研究の成果が途切れないようにする。	①授業で学習課題や学習計画を児童が決める場面を設定できたか。 ②授業で仲間と協力して考えたり、仲間の考えを参考にしながら自分の考えをもったりする場面を設定できたか。 ③授業で学びを振り返り、新たな課題を見つける場面を設定できたか。	①中学年以上の児童が学習課題を決めて取り組む機会が増加した。学習計画の立案は学年間の取り組みに差が生じた。 ②すべての学年で仲間と協力して考え自分の考えをもつ場面を設定することができた。 ③すべての学年で学びを振り返る場面を設定することができた。新たな課題を見つける場面は学年間での取り組みに差が生じた。	B	・方策の評価指標である「学習課題を児童が決める」「仲間の考えを参考にしながら自分の考えをもつ」「新たな課題を見つける」においては試行錯誤の段階である。令和7年度も引き続き、指導主事からの講話を聞く機会を設定し、実践を重ねる。	・タブレット学習が進んでいくと、児童が進んで発表する機会が少なくなってしまうことへの懸念がある。 ・発表の仕方が多様化しているとも捉えられるが、言葉で表現することも大切である。 ・学びのポイント「じ・し・や・く」は、学校としてもいろいろ悩みながら進めている。 ・「不易と流行」という言葉があるが、不易の部分である「自分の言葉で伝える」力はやはり必要な力であると考え。
2	<現状> ○児童アンケートでは「毎日元気に登校しています」の質問に対し、肯定的回答が94%である。 ○アンケート等を活用し、いじめの認知、認知、対応に繋げている。 ○児童のさまざまな困り感を把握し、保護者や関係機関と連携しながら、児童が安心して学校にいられる環境づくりを進めている。  <課題> ○校舎のリフレッシュ工事に伴い、教育活動を停滞させない環境の整備と、現状の環境下でも充実した教育活動を継続することが課題である。	・安全安心な学校生活の充実  ・教育環境の変化に伴う工夫改善	①児童の状況を細やかに把握し、迅速に保護者との連携を図りながら、組織的に支援や相談を行う。 ②専門職による教育相談の調整や教育相談日の設定等を継続して行い、学校に相談しやすい環境を整備する。 ③Sola 一むを開設し、児童にとって落ち着いて過ごすことができるように空間の工夫や人員の配置を充実させる。	①学校自己評価の児童アンケートの「学校に楽しく通っている」への肯定的回答をする児童の割合が95%以上となったか。 ②学校評価の児童、保護者、教員アンケートにおいて、関連する項目の肯定的な回答の割合が平均80%以上になる。 ③長欠児童の登校状況に改善傾向が見られたか。	①学校自己評価の児童アンケートの「学校に楽しく通っている」への肯定的回答をする児童の割合が95%で概ね達成した。 ②学校評価の教育相談に関する項目で、児童、保護者、教員の肯定的な回答は86%であり、達成した。 ③Sola 一むを開設した。12月からは開設時間を拡大した。Sola 一むの利用をきっかけに欠席日数の減少が見られた。	A	・これまで、専門委員会は「生徒指導・教育相談」と「特別支援教育」とで分かれていたが、令和7年度はこの2つを統合することで、多面的に児童を把握し、より組織的な教育相談体制を構築していく。 ・Sola 一むは継続して見守りボランティアを募り、開設時間の拡大を図ってより利用しやすい場所とする。	・Sola 一むは幼稚園の視点から見てより取り組みである。 ・Sola 一むに登録されていない児童にも、状況に応じて柔軟に利用できるようにしているのは良い取り組みである。 ・今後はSola 一むに行きたいと言えない児童をどのように対応していくかが課題である。 ・Sola 一むボランティアに参加したことで学校と関わり合えてうれしい。 ・Sola 一むボランティアが入ることで、地域と学校との関わりがより深かまるのがよい。
3	<現状> ○学校運営協議会準備委員会において「豊かに関わる子どもたち」を目指すための具体的方策について熟議を重ね、地域の方々や児童とが交流する行事を実施した。  <課題> ○令和5年度は、学校公開の機会が限られ、学校評価のアンケートでも「判断できない」という回答が多く見られた。 ○学校公開の機会と情報発信を充実させ、保護者・地域が、更に学校に関わることができるようにすることが課題である。 ○コミュニティ・スクールの認知度を高め、より多くの保護者や地域の方々との関わりを増やしていくことが、今後の課題である。	・目指す児童像を具現化するための、具体的方策の実践	①学校運営協議会で熟議を重ね、目指す児童像の具現化や学校課題改善に向けての方策を見出ししていく。 ②目指す児童の実現に向けた活動を推進するために、委員会や児童会を中心に、互いに顔が見える交流活動を、ICT等を活用し企画、実践する。	①学校運営協議会での熟議を通して豊かに関わる子どもたちの姿を実現するための活動について具体的に計画し、関係団体等の協力を得ながら実践することができたか。 ②学校自己評価の教員アンケートにおいて「学校と保護者、地域との連携」の項目で肯定的な回答の割合が90%以上になったか。	①7月に七夕まつりを実施した。関係協力団体がそれぞれ役割をもって活動した。12月にはSola 一む利用時間の拡大し、学校運営協議会委員や民生委員にも協力を働き掛け、利用者の児童の見守りを行った。 ②学校評価の教員アンケートで「学校と保護者、地域との連携」の項目で肯定的な回答の割合が90%で概ね達成した。第2回の学校運営協議会では児童会の児童と運営協議会員とで意見交換を行うこともできた。	B	・令和7年度は地域の各団体の取り組みと「コミュニティ・スクール」の取り組みとを関連付けていくことで、より顔が見える交流の機会を増やしていく。 ・保護者や地域の方に行事やイベントへの参加を促したり、実施する行事やイベントに「コミュニティ・スクール」が関わっていることを積極的にアナウンスしたりしていく。	・コミュニティスクールをより充実したものにしていく上で、学校が地域に何を求めているのかを知りたい。 ・七夕まつり、音楽会等の学校行事で、保護者以外の地域の方々との関わりをいかにして広げていくかを検討していく必要がある。 ・プラザノースの作品展を見ると児童生徒の作品は素晴らしいものばかりであった。原山小学校の児童の作品も、地域の方々に見て、触れてもらう機会があるとよい。例えば学校美術館として一部の場所を開放するか、近くの公共の場を借りて展示するとかが考えられる。
4	<現状> ○不断の授業改善に向け、教員一人ひとりが当事者意識をもって研修に臨んでいる。 ○学校全体としても個人レベルでも、働き方の効率化が進んでいる。  <課題> ○学校課題研修を効果的に行い、普段の授業でのICTの活用の更なる工夫改善が求められる。 ○教員が「働きがい」や「やりがい」を実感できる働き方改革を進めていく必要がある。	・授業改善研修の充実と業務改善策の具体化	①一人一人の教員が目指す児童像を理解し、その具現化に向けた授業を年間2回以上公開する。 ②教員が校内で自己研鑽ができる研修体制を整える。 ③業務改善委員会を毎月1回開催し、具体的提案を検討する。その内容を、全教職員で共有し実践する。	①目指す児童像とその具現化に向けた手立てを明確に位置付けた授業(教科等は問わず)を、80%以上の教員が1年間に2回以上公開することができたか。 ②学校評価における教職員アンケートの「意欲・資質向上」の項目で肯定的な回答の割合が90%以上になったか。 ③業務改善委員会からの具体的な提案を全教職員が共有し実践するとともに、効果の検証を行うことができたか。	①すべての教員が1年間に2回以上公開することができた。 ②学校評価における教職員アンケートの「意欲・資質向上」の項目で肯定的な回答の割合が100%であった。実践を積極的に発信し、意見交換を行うなどの協働的な研修体制が資質向上を実現することに繋がった。 ③年間6回業務改善委員会を実施した。業務改善アンケートでは91%の教職員が業務改善が進んでいると回答し目標を達成した。	A	・今後もお互いの実践を発信し合うことで研修を深める。公開授業とフィードバックタイムは、実施時期を計画的に設定することで業務改善と質の高い研修との両立を図る。 ・教材費などの集金は依然として現金でのやりとりとなっており負担感がある。令和7年度は「ゆうちょ銀行」の送金システムを利用することで業務の負担感の軽減を図る。	・業務改善の取り組みが進んでいる様子がありとてもよい。 ・教職員の意見を元に改善案を検討し、短い期間で具体化していることが成果に表れている。 ・学校評価における教職員アンケートの「意欲・資質向上」の項目で、肯定的な回答の割合が100%であったのは素晴らしい取り組み成果と言える。